

7

[東北大]

s を正の実数とする。鋭角三角形 ABC において、辺 AB を $s:1$ に内分する点を D とし、辺 BC を $s:3$ に内分する点を E とする。線分 CD と線分 AE の交点を F とする。以下の問いに答えよ。

- (1) $\overrightarrow{AF} = \alpha \overrightarrow{AB} + \beta \overrightarrow{AC}$ とするとき、 α と β を求めよ。
- (2) F から辺 AC に下ろした垂線を FG とする。 FG の長さが最大となるときの s を求めよ。

8

[千葉大]

n を 4 以上の整数とする。座標平面上で正 n 角形 $A_1A_2\cdots A_n$ は点 O を中心とする半径 1 の円に内接している。 $\vec{a} = \overrightarrow{OA_1}$, $\vec{b} = \overrightarrow{OA_2}$, $\vec{c} = \overrightarrow{OA_3}$, $\vec{d} = \overrightarrow{OA_4}$ とし,
 $k = 2\cos\frac{2\pi}{n}$ とおく。そして、線分 A_1A_3 と線分 A_2A_4 との交点 P は線分 A_1A_3 を
 $t:1-t$ に内分するとする。

- (1) \vec{a} および \vec{d} を, \vec{b} , \vec{c} , k を用いて表せ。
- (2) t を k を用いて表し, $\frac{1}{2} \leq t < \frac{3}{4}$ を示せ。
- (3) 不等式 $\frac{\triangle PA_2A_3}{\triangle A_1A_2A_4} > \frac{1}{12}$ を示せ。

9

[東京大・文]

1 辺の長さが 1 の正六角形 $ABCDEF$ が与えられている。点 P が辺 AB 上を、点 Q が辺 CD 上をそれぞれ独立に動くとき、線分 PQ を $2:1$ に内分する点 R が通りうる範囲の面積を求めよ。

10

[京都大・文]

座標空間において原点 O と点 $A(0, -1, 1)$ を通る直線を l とし、点 $B(0, 2, 1)$ と点 $C(-2, 2, -3)$ を通る直線を m とする。 l 上の 2 点 P, Q と、 m 上の点 R を $\triangle PQR$ が正三角形となるようにとる。このとき、 $\triangle PQR$ の面積が最小となるような P, Q, R の座標を求めよ。

11

[東京医歯大]

xyz 空間において、点 $O(0, 0, 0)$ と点 $A(0, 0, 1)$ を結ぶ線分 OA を直径にもつ球面を σ とする。このとき以下の各問いに答えよ。

- (1) 球面 σ の方程式を求めよ。
- (2) xy 平面上にあって O と異なる点 P に対して、線分 AP と球面 σ との交点を Q とするとき、 $\overrightarrow{OQ} \perp \overrightarrow{AP}$ を示せ。
- (3) 点 $S(p, q, r)$ を、 $\overrightarrow{OS} \cdot \overrightarrow{AS} = -|\overrightarrow{OS}|^2$ を満たす、 xy 平面上にない定点とする。 σ 上の点 Q が $\overrightarrow{OS} \perp \overrightarrow{SQ}$ を満たしながら動くとき、直線 AQ と xy 平面との交点 P はどのような図形を描くか。 p, q, r を用いて答えよ。

7

[東北大]

- (1)
- $\triangle ABE$
- と直線
- CD
- にメネラウスの定理を適用して、

$$\frac{AD}{DB} \cdot \frac{BC}{CE} \cdot \frac{EF}{FA} = 1, \quad \frac{FA}{EF} = \frac{AD}{DB} \cdot \frac{BC}{CE}$$

条件より、 $AD:DB = s:1$, $BE:EC = s:3$ なので、

$$\frac{FA}{EF} = \frac{s}{1} \cdot \frac{s+3}{3} = \frac{s(s+3)}{3}$$

すると、 $\overrightarrow{AF} = \frac{s(s+3)}{s(s+3)+3} \overrightarrow{AE}$ となり、

$$\overrightarrow{AF} = \frac{s(s+3)}{s(s+3)+3} \cdot \frac{3\overrightarrow{AB} + s\overrightarrow{AC}}{s+3} = \frac{s}{s^2+3s+3} (3\overrightarrow{AB} + s\overrightarrow{AC})$$

ここで、条件より $\overrightarrow{AF} = \alpha \overrightarrow{AB} + \beta \overrightarrow{AC}$ で、 \overrightarrow{AB} と \overrightarrow{AC} は 1 次独立なので、

$$\alpha = \frac{3s}{s^2+3s+3}, \quad \beta = \frac{s^2}{s^2+3s+3}$$

- (2)
- $\overrightarrow{AH} = \alpha \overrightarrow{AB}$
- ,
- $\overrightarrow{AI} = \beta \overrightarrow{AC}$
- とおくと、
- $\overrightarrow{AF} = \overrightarrow{AH} + \overrightarrow{AI}$
- から、

$$\triangle AFC = \alpha \cdot \triangle ABC \cdots \cdots \textcircled{1}$$

さて、 F から辺 AC に垂線 FG を下ろすと、

$$\triangle AFC = \frac{1}{2} AC \cdot FG \cdots \cdots \textcircled{2}$$

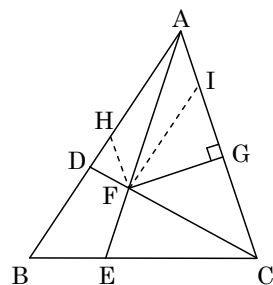
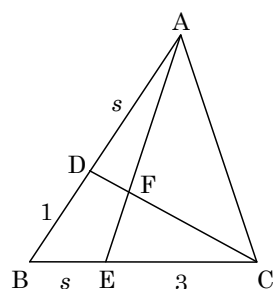
$$\textcircled{1}\textcircled{2} \text{より}, \quad \frac{1}{2} AC \cdot FG = \alpha \cdot \triangle ABC, \quad FG = \frac{2\alpha}{AC} \triangle ABC$$

これより、 FG の長さが最大となるのは α が最大となるときで、(1)の結果を $\alpha = \frac{3}{s+3+\frac{3}{s}}$ と変形すると、相加平均と相乗平均の関係より、

$$s + \frac{3}{s} \geq 2\sqrt{s \cdot \frac{3}{s}} = 2\sqrt{3}$$

ただし、等号は $s = \frac{3}{s}$ すなわち $s = \sqrt{3}$ のとき成立し、これより、

$$\alpha = \frac{3}{s+3+\frac{3}{s}} \leq \frac{3}{2\sqrt{3}+3} = 2\sqrt{3}-3$$

よって、 FG の長さが最大となるときの s の値は $s = \sqrt{3}$ である。

[解説]

平面ベクトルの三角形への応用問題で、頻出の構図です。解答例では図形的に処理をしましたが、(1)では分点ベクトル、(2)では内積を用いても、記述量はやや増加する程度です。

8

[千葉大]

- (1) 点 O を中心とする半径 1 の円に内接する正 n 角形 $A_1A_2\cdots A_n$ に対し、直線 OA_2 は線分 A_1A_3 の垂直二等分線であり、 OA_2 と A_1A_3 との交点を B_2 とおくと、

$$OB_2 = \cos \frac{2\pi}{n} = \frac{k}{2}$$

すると、 $\frac{\vec{a} + \vec{c}}{2} = \frac{k}{2}\vec{b}$ より、 $\vec{a} = k\vec{b} - \vec{c}$ である。

同様に、直線 OA_3 は線分 A_2A_4 の垂直二等分線なので、 $\vec{d} = k\vec{c} - \vec{b}$ である。

なお、 $n=4$ のときは $k=0$ であるが、このときも成立している。

- (2) まず、 P は線分 A_1A_3 を $t:1-t$ に内分するので、

$$\begin{aligned}\vec{OP} &= (1-t)\vec{a} + t\vec{c} = (1-t)(k\vec{b} - \vec{c}) + t\vec{c} \\ &= (1-t)k\vec{b} + (2t-1)\vec{c} \cdots \cdots \textcircled{1}\end{aligned}$$

また、対称性より、 P は線分 A_4A_2 を $t:1-t$ に内分するので、同様にすると、

$$\begin{aligned}\vec{OP} &= (1-t)\vec{d} + t\vec{b} = (1-t)(k\vec{c} - \vec{b}) + t\vec{b} \\ &= (2t-1)\vec{b} + (1-t)k\vec{c} \cdots \cdots \textcircled{2}\end{aligned}$$

①②より、 \vec{b} と \vec{c} は 1 次独立なので、 $(1-t)k = 2t-1$ となり、

$$(k+2)t = k+1, \quad t = \frac{k+1}{k+2}$$

ここで、 $n \geq 4$ より $0 < \frac{2\pi}{n} \leq \frac{\pi}{2}$ となり、これより $0 \leq k < 2$ なので、

$$t - \frac{1}{2} = \frac{k+1}{k+2} - \frac{1}{2} = \frac{k}{2(k+2)} \geq 0, \quad t - \frac{3}{4} = \frac{k+1}{k+2} - \frac{3}{4} = \frac{k-2}{4(k+2)} < 0$$

よって、 $\frac{1}{2} \leq t < \frac{3}{4}$ である。

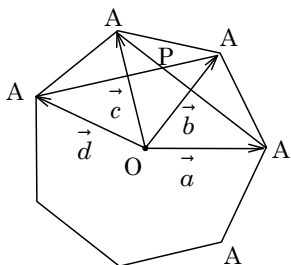
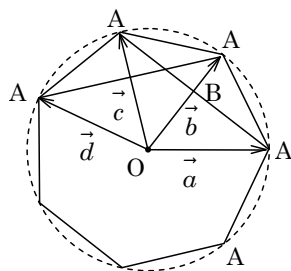
- (3) 条件から、 $A_1P:PA_3 = t:1-t$ より、 $\triangle PA_2A_3 = \frac{1-t}{t}\triangle PA_1A_2 \cdots \cdots \textcircled{3}$

また、 $A_2P:PA_4 = 1-t:t$ より、 $\triangle PA_1A_2 = (1-t)\triangle A_1A_2A_4 \cdots \cdots \textcircled{4}$

③④より、 $\triangle PA_2A_3 = \frac{(1-t)^2}{t}\triangle A_1A_2A_4$ となり、(2)から、

$$\frac{(1-t)^2}{t} - \frac{1}{12} = \frac{12t^2 - 25t + 12}{12t} = \frac{(3t-4)(4t-3)}{12t} > 0$$

よって、 $\frac{\triangle PA_2A_3}{\triangle A_1A_2A_4} = \frac{(1-t)^2}{t} > \frac{1}{12}$ である。



[解説]

ベクトルの図形への応用です。(2),(3)は分数関数の値域を調べる方法もあります。

9

[東京大・文]

1 辺の長さが 1 の正六角形 $ABCDEF$ の辺 AB 上を点 P , 辺 CD 上を点 Q が独立に動くとき, $0 \leq p \leq 1$, $0 \leq q \leq 1$ として, $AP:PB = p:1-p$, $DQ:QC = q:1-q$ とおく。

さて, AD の中点を O とし, $PR:RQ = 2:1$ から,

$$\begin{aligned}\overrightarrow{OR} &= \frac{1}{3}\overrightarrow{OP} + \frac{2}{3}\overrightarrow{OQ} \\ &= \frac{1}{3}(\overrightarrow{OA} + p\overrightarrow{AB}) + \frac{2}{3}(\overrightarrow{OD} + q\overrightarrow{DC}) \\ &= \frac{1}{3}\overrightarrow{OA} + \frac{2}{3}\overrightarrow{OD} + \frac{1}{3}p\overrightarrow{AB} + \frac{2}{3}q\overrightarrow{DC}\end{aligned}$$

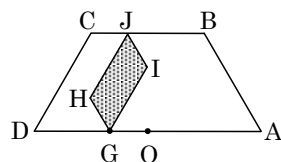
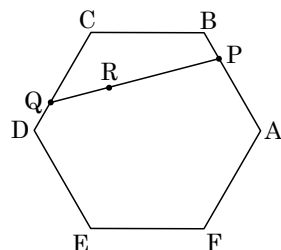
ここで, AD を $2:1$ に内分する点を G とおくと, $\overrightarrow{OG} = \frac{1}{3}\overrightarrow{OA} + \frac{2}{3}\overrightarrow{OD}$ となり,

$$\overrightarrow{OR} = \overrightarrow{OG} + \frac{1}{3}p\overrightarrow{AB} + \frac{2}{3}q\overrightarrow{DC}, \quad \overrightarrow{GR} = \frac{1}{3}p\overrightarrow{AB} + \frac{2}{3}q\overrightarrow{DC}$$

そこで, $0 \leq \frac{1}{3}p \leq \frac{1}{3}$, $0 \leq \frac{2}{3}q \leq \frac{2}{3}$ から, $\overrightarrow{GH} = \frac{1}{3}\overrightarrow{AB}$, $\overrightarrow{GI} = \frac{2}{3}\overrightarrow{DC}$ とおくと, 点 R は右図の平行四辺形 $GIJH$ の内部または辺上を動く。

$|\overrightarrow{GH}| = \frac{1}{3}$, $|\overrightarrow{GI}| = \frac{2}{3}$, $\angle HGI = \frac{\pi}{3}$ より, その面積は,

$$2\left(\frac{1}{2} \cdot \frac{1}{3} \cdot \frac{2}{3} \sin \frac{\pi}{3}\right) = \frac{\sqrt{3}}{9}$$



[解 説]

平面ベクトルと領域の問題です。成分表示を利用するかどうかで, 2 つの解法があります。この問題ではどちらでも可能ですが, 前者は後者に比べ, 記述量がかなり増えます。

10

[京都大・文]

原点 O と点 $A(0, -1, 1)$ を通る直線 l 上に 2 点 P, Q , 点 $B(0, 2, 1)$ と点 $C(-2, 2, -3)$ を通る直線 m 上に点 R がある。ここで、線分 PQ の中点を M とするとき、 $\triangle PQR$ が正三角形より、その面積は、

$$\triangle PQR = \frac{1}{2} MR \cdot \frac{2}{\sqrt{3}} MR = \frac{1}{\sqrt{3}} MR^2$$

すると、 $\triangle PQR$ の面積が最小となるのは、 MR が最小の場合である。すなわち、 $MR \perp l$ かつ $MR \perp m$ である。

そこで、 $\overrightarrow{OA} = (0, -1, 1)$, $\overrightarrow{BC} = (-2, 0, -4) = -2(1, 0, 2)$ なので、 t, s を実数とすると、直線 l, m は、

$$l: (x, y, z) = t(0, -1, 1), \quad m: (x, y, z) = (0, 2, 1) + s(1, 0, 2)$$

これより、 $M(0, -t, t)$, $R(s, 2, 1+2s)$ とおけ、 $\overrightarrow{MR} = (s, 2+t, 1+2s-t)$

さて、 $MR \perp l$ から $\overrightarrow{MR} \cdot \overrightarrow{OA} = 0$ となり、

$$-2-t+1+2s-t=0, \quad -2t+2s=1 \cdots \cdots \textcircled{1}$$

また、 $MR \perp m$ から $\overrightarrow{MR} \cdot \overrightarrow{BC} = 0$ となり、

$$s+2(1+2s-t)=0, \quad -2t+5s=-2 \cdots \cdots \textcircled{2}$$

①②より、 $s=-1, t=-\frac{3}{2}$ となり、 $M(0, \frac{3}{2}, -\frac{3}{2})$, $R(-1, 2, -1)$ である。

これより、 $\overrightarrow{MR} = (-1, \frac{1}{2}, \frac{1}{2})$ から、 $|\overrightarrow{MR}| = \sqrt{1+\frac{1}{4}+\frac{1}{4}} = \frac{\sqrt{6}}{2}$

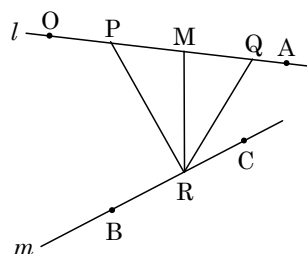
すると、 $PQ = \frac{2}{\sqrt{3}} \cdot \frac{\sqrt{6}}{2} = \sqrt{2}$ となり、 $|\overrightarrow{OA}| = \sqrt{1+1} = \sqrt{2}$ から、点 P, Q の座標は、

$$\begin{aligned} \overrightarrow{OM} \pm \frac{1}{2} PQ \cdot \frac{1}{\sqrt{2}} \overrightarrow{OA} &= \left(0, \frac{3}{2}, -\frac{3}{2}\right) \pm \frac{\sqrt{2}}{2} \cdot \frac{1}{\sqrt{2}} (0, -1, 1) \\ &= \left(0, \frac{3}{2}, -\frac{3}{2}\right) \pm \left(0, -\frac{1}{2}, \frac{1}{2}\right) \end{aligned}$$

よって、 $P(0, 1, -1)$, $Q(0, 2, -2)$, または $P(0, 2, -2)$, $Q(0, 1, -1)$ である。

[解 説]

高校数学に「代数・幾何」という科目があったころの頻出題の 1 つです。ポイントは、正三角形の中線がねじれの位置にある l と m の共通垂線ということです。なお、最後の点 P, Q の座標を求める計算は、単位ベクトルを利用しています。



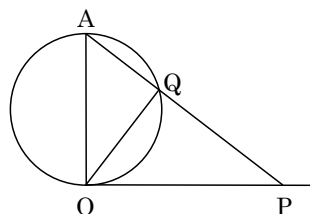
11

[東京医歯大]

- (1) $O(0, 0, 0)$, $A(0, 0, 1)$ に対し, 線分 OA が直径の球面 σ は, 中心 $(0, 0, \frac{1}{2})$, 半径 $\frac{1}{2}$ より, その方程式は,

$$x^2 + y^2 + \left(z - \frac{1}{2}\right)^2 = \frac{1}{4}$$

- (2) xy 平面上の点 $P(P \neq O)$ に対して, 3 点 O, A, P を含む平面を考えると, この平面による球面 σ の切り口は OA が直径の円となるので, $\overrightarrow{OQ} \perp \overrightarrow{AP}$ である。



- (3) $P(x, y, 0)$ とおき, $AQ : QP = t : 1-t$ ($0 < t < 1$) とすると,

$$\begin{aligned}\overrightarrow{OQ} &= (1-t)\overrightarrow{OA} + t\overrightarrow{OP} = (1-t)(0, 0, 1) + t(x, y, 0) \\ &= (tx, ty, 1-t) \cdots \cdots \textcircled{1}\end{aligned}$$

- (2) より, $\overrightarrow{OQ} \perp \overrightarrow{AP}$ なので, $\overrightarrow{AP} = (x, y, -1)$ から,

$$tx^2 + ty^2 - (1-t) = 0, \quad t = \frac{1}{x^2 + y^2 + 1} \cdots \cdots \textcircled{2}$$

さて, $S(p, q, r)$ ($r \neq 0$) から $\overrightarrow{AS} = (p, q, r-1)$ となり, $\overrightarrow{OS} \cdot \overrightarrow{AS} = -|\overrightarrow{OS}|^2$ より,

$$p^2 + q^2 + r(r-1) = -(p^2 + q^2 + r^2), \quad 2(p^2 + q^2 + r^2) = r \cdots \cdots \textcircled{3}$$

さらに, $\overrightarrow{OS} \perp \overrightarrow{SQ}$ なので, ①から $\overrightarrow{SQ} = (tx - p, ty - q, 1-t-r)$ となり,

$$\begin{aligned}p(tx - p) + q(ty - q) + r(1-t-r) &= 0 \\ ptx + qty + r(1-t) &= p^2 + q^2 + r^2 \cdots \cdots \textcircled{4}\end{aligned}$$

- ③④より, $2ptx + 2qty + 2r(1-t) = r$, $2ptx + 2qty - 2tr + r = 0$

②を代入すると, $\frac{2px}{x^2 + y^2 + 1} + \frac{2qy}{x^2 + y^2 + 1} - \frac{2r}{x^2 + y^2 + 1} + r = 0$ となり,

$$2px + 2qy - 2r + r(x^2 + y^2 + 1) = 0, \quad x^2 + y^2 - 1 + \frac{2p}{r}x + \frac{2q}{r}y = 0$$

$$\left(x + \frac{p}{r}\right)^2 + \left(y + \frac{q}{r}\right)^2 = \frac{p^2 + q^2 + r^2}{r^2}$$

ここで, ③から $r > 0$ となり, $\left(x + \frac{p}{r}\right)^2 + \left(y + \frac{q}{r}\right)^2 = \frac{1}{2r}$

したがって, 点 P は xy 平面上で, 中心 $\left(-\frac{p}{r}, -\frac{q}{r}, 0\right)$, 半径 $\frac{1}{\sqrt{2r}}$ の円を描く。

[解 説]

空間ベクトルの図形への応用問題です。上の解答例は, 成分計算を主体として記述しています。